

## メディアアフィロソフィー

### 第二回 「世界」を引き受けるということ

高田明典

発達した文明にはどこにでも「都市伝説」が発生する。ローマでも、パリでも、ロンドンでも、ベルリンでも、ニューヨークでも、東京でも、この「都市伝説」が発生しない都市はほとんど一つもない<sup>(1)</sup>。

今、日本で「都市伝説」がちよつとしたブームになっているという<sup>(2)</sup>。都市伝説は社会学における重要な研究領域の一つである。いわゆる伝統的な「伝説」とは異なって、最近の出来事として語られ、「事実である」として語られる。それが社会学において研究対象とされるのは、現代に生活する私たちの不安や欲望がそこに結晶しているからである。

近年の例では「当たり前屋に注意」というものがある。これは、近畿圏のナンバープレートをつけた車の「当たり前屋集団」がいるので注意しろというものである。警察はまったく根拠が無いとして逆に注意を喚起しているものの、このうわさを信じている人は少なくない<sup>(3)</sup>。私はこの話を母親から聞いた。丁寧にもFAXで送信されてきた。どうも実家の周辺で回覧されたものであるらしい。つまり、「本当のこと」として扱われていたということだ。この例では、関東における近畿圏に対してのうつつすらとした嫌悪感や、自動車事故に対しての不安感などが背景に存在し、「信じるにたる」理由を構成していると考えられる。つまり人は、「信じるべきもの」よりも「信じたいもの」を信じるということだ。

現代の日本における都市伝説ブームは、本来の都市伝説とはずいぶん異なっている。それは最初から「嘘」として語られる。誰もそれが本当のことだと信じてはいない。「信じるか信じないかは、あなたの自由」などというものは、もはや都市伝説ではなく、単なるウソ話だ。それを、「語りうる価値を持たない者たちが何かを語るための数少ない手段の一つである」と切り捨

---

(1) 芥川龍之介『さまよえる猶太人』冒頭による。「基督教国にはどこにでも、「さまよえる猶太人」の伝説が残っている。伊太利イタリーでも、仏蘭西フランスでも、英吉利イギリスでも、独逸ドイツでも、奥太利オウスマリでも、西班牙スペインでも、この口碑が伝わっていない国は、ほとんど一つもない。従って、古来これを題材にした、芸術上の作品も、沢山ある。」

(2) 二〇〇七年当時。漫才師コンビ「ハローバイバイ」の関暁夫による『ハローバイバイ・関暁夫の都市伝説―信じるか信じないかはあなた次第』(二〇〇六年十一月)、並木伸一郎『最強の都市伝説』(二〇〇五年五月)等が刊行されていた。

(3) 「サトウタツヤ (二〇〇四) うわさどパニック、立命館人間科学研究No.7、一九三頁―二〇三頁」において、当時すでに問題にされていた。

てることは容易である<sup>④</sup>。そのようなものが多く受容されているのは「衆愚」状態の最たるものであると言える。だから繰り返し返すが、それらは「都市伝説」などでは決してない。都市伝説は「多くの人間が本当だと信じている嘘」である。問題は、そのような「最初から嘘とわかる話」がどうして(嘘として)受容されるのかということと、その面白さはどこにあるのかという二つに集約される。

彼らは「嘘」に慣れている。もちろんテレビのことだ。いや、テレビだけではないかもしれない。本当のことがどこにあるのかわからないほど現代は嘘にまみれている。9・11の疑惑をとりあげた「The Great Conspiracy」という番組をYouTubeで何度も見ただけでも、見れば見るほど本当のことがわからなくなってくる。いや、判断できるほどの材料を少なくとも私は持っているということなのだが、せいぜい「まさかねえ〜」という程度の反応しかできないのが正直なところだ。もちろん「陰謀史観」として退けることはたやすい。しかし一方で、北朝鮮の拉致「疑惑」は「事実」だったではないか<sup>⑤</sup>。

事実とは何であるかを考えるのはそう容易ではない。ガダマー<sup>⑥</sup>は「歴史的事実」とは解釈の産物であると指摘する。「二〇〇一年九月十一日に世界貿易センタービルに二機の旅客機が激突した」ということを事実であると認めない人は極めて少ないが、実際のところその「事実」はもう記憶の中にしかない。それを「本当に起こったこと」とだと判断すること自体が、既に解釈である。歴史的事件に関してのことばかりではない。どのような「事実」であってもすべて記憶の中にしかない。さらに言えば、少なくとも私は、それを直接に見たわけではない。テレビでの映像を見ただけだ。「事実ではない可能性がある」などと言おうとしているわけではない。私たちが「事実」だと認識しているものの多くにおいて、その「事実性」は、かなりあやふや

2

---

④ ま、通常はこの対応になる。最近では、ブログやらSNSやらtwitterやらで、やたらと「語るべき価値を持たぬ者たち」のくだらない文言が世間を席卷しているようではあるが、そんなものに付き合おうのは時間の無駄でしかない。それは単に面倒だからであり、他に読むべき文献は大量に存在しているわけだし、人生の時間は限られているからでもある。くだらない「たぐ」に付き合っている暇はないということ。ただし、そのような腐った社会と向き合い、吟味検討し、そこに何らかの意味を見出そうとする(まともな)社会学者の存在には、頭が下がる思いがする。ただし、それらに迎合するかのよう(まともじゃない)社会学者のほうが多いね。

⑤ <http://www.youtube.com/watch?v=8MfOj80Or4>  
(4) "The Great Conspiracy: the 9-11 news special you never saw 1"

⑥ 学生の頃(一九七〇年代の終わり頃)の記憶なので曖昧だが、「日本海沿岸の人気の少ない海岸で、黒いスーツの上着にステテコ姿の数人の男たちに拉致されかけた」などというカプルの証言が紹介されていた。当時は、「なんだソリヤ」「ありえねえ(当時この表現は無かったが)」と感していた。私も含めて当時の「雰囲気」としては、いくらなんでも拉致などウソ話だろうというものだったと記憶している。今でこそ各報道機関はそれをあたりまえの事実として報道しているが、当時は「そんなことを信じるなんて愚かなことです」的な雰囲気が蔓延していた。もう誰もそのことを言わないけどね。たくさんあるマスコットの黒歴史の1つ。

⑦ ハンス・ゲオルグ・ガダマー (Gadamer, Hans Georg)。現代解釈学の祖。現代解釈学は「ガダマー解釈学」とも呼ばれる。

な根拠によって支えられている。たとえば「あの映像は作り物だった」と主張する人間がいたとして、その人間を論破できるかどうかを考えてみると、その「事実性」のよって立つ基盤がいかにか脆弱なものであるかがわかるだろう。「じゃあ、それを目撃したと言う人たちは嘘をついているというのかい」という反論は、弱い。事実そのものを問題にしているのではなく、目撃したと主張する人たちへの信頼を根拠としているからだ。筋金入りの懐疑論者（というよりも詭弁者）なら、こう言うだろう——「そこまでやる人たちだから、証言を捏造することなど簡単にやるさ……。だいたいからしてそれは目撃証人から直接に聞いた話なの？ それだってテレビの報道じゃないのかい？——と。」

（二）でさらに、自分がその激突の場面を直接に見た人間であると仮定しよう。「私は見た」と主張することになるわけだが、先ほどの筋金入りの懐疑論者への反論はこんな感じだ——「君が嘘をついているとは思わなければ、それをどうやって証明することができる？——」もどかしい。喉の奥に奇妙な嘔吐感が発生する。そんなとき私なら（おそらく私だけではなく）こう大声で叫ぶだろう——「見たと言ったら見たんだよ！」

モラン（④）は「確実な証言への信頼」ということも、私たちが日常の生活の中で行っていることなのだ指摘する。私たちが「事実だ」と信じる事柄というのは、自分が事実として疑っていない別の事柄との整合性によって裏打ちされている。しかし、では、その別の事柄の信憑性は何によって裏打ちされているのか。

事実を底で支える根拠というものは、私たちが通常感じているほどには堅牢なものではない。「私は今、この文章を書いている」は、私にとってはまぎれもない事実である。また、「あなたは今、この文章を読んでいる」も、あなたにとってはまぎれもない事実であろう。しかしその「事実」を裏打ちする根拠は何だろう。自分以外の誰かに対して、それが確実に事実であることを証明してみせることは可能なことなのか、という問題である（二〇）。「だつてそうなんだ」としか言いようのない「事実性」がそこには存在しているが、もしもそうならば、事実とは「言い張るだけ」のことによって裏打ちされているということになってしまう。

④ 懐疑論者とは「疑うこと」を通して正しさに到達しようとする者たちのことである。つまり、決して「疑うこと」によって相手を論破したり不快にさせたりすることが彼らの目的ではない（当たり前なことだが）。懐疑論の「親王」と目されているのはデヴィッド・ヒューム(David Hume)であるが、特に米国ではウケが悪いようである。

⑤ 前述、エドガール・モラン (Morin, Edgar)、『出来事と危機の社会学』（浜名優美、福井和美訳、法政大学出版局 一九九〇）も重要な文献の一つ。モランは、私たちの社会の「裂け目」としての「うわさ」や「事件」を観察することによって、そこに存在する本質的な意味を検討することが重要であると考える。

（二〇）（二）に論理的な飛躍があることに十分注意する必要がある。「自分にとっての事実」が問題なのではなく、それが「他者にとっての事実」となる要件について考えようとしているからである。そして、「事実」とは、常に「他者にとっての事実」である。（二）での問題は「あまりにも明らかな、自分にとっての事実」が、事実（＝「他者にとっての事実」）になることの意味と意義を問う直すことでもある。さらに言えば（少々先走った議論であるが）、「自分にとっての事実」さえ、その実、他者によって承認されて初めて「事実」となる。

ウイトゲンシュタイン(二)は「世界は事実の総体であり、事物の総体ではない(三)」と指摘する。しかし世界が「もの」の総体ではなく「発生し、成立している事実」の総体であるとするならば、その事実が成立しているか否かが問題となる。ウイトゲンシュタインはその後期思想(三)において、「この確実性について詳細に議論した。そこにおいて彼は「私は」を知っている」という形の文に着目し、それを「超越確実性言明」と呼んだ。それは、「根拠を明らかにすることもできず、ただ単にそうなのだ」と主張することしかできないこと」を指す。これは、きわめて重要な指摘である。なぜなら、「世界は事実の総体である」ならば、その事実を裏打ちするのは「人」でしかないということであり、結局世界を成立させているのは、「人」の確信であるということになるからだ(四)。

「発掘！あるある大事典Ⅱ」の嘘(五)は、さらに多くの問題を提起している。ただし、目くじらを立てるほどの問題ではないという指摘も、そう無理なものではないと感ずる。「どうせテレビ」だからね——だって全部嘘だろ。「あるある大事典」が問題視されるなら、スピリチュアルとか霊視とか超能力はどうなのさ。まさか、「あれは本当だから」などとほ言わないよね。そうか——タダで見せてるんだから、「たのしければ」嘘でも問題ないだろう、ってことか。

ニュースを読むアナウンサーが、超能力バラエティ番組やスピリチュアル番組で「嘘」に加担する。じゃ、ニュースも嘘か。私たちは、その「内容」ではなく、誰がそれを言っているかによって真偽を判断することが多い。なぜなら「事実を引き受ける」のは人でしかないからであり、「本来的な真偽」など、そう簡単には判定できないからだ。「あの人が言っているから本当」「テレビで言っているから本当」「新聞に書いてあるから本当」「活字になっているから本当」

4

(二) ルードヴィヒ・ウイトゲンシュタイン (Wittgenstein, Ludwig)。『論理哲学論考』『哲学的探求』などで知られる。二〇世紀最高の哲学者とも。ただし「アマチュア好みの哲学者」として揶揄気味に扱われることもある。そのようなことを言う人たちが、じゃあウイトゲンシュタインをちゃんと理解しているのかというと、かなり微妙な感じの人が多い。単に「哲学科出身」というレベルだと、『論理哲学論考』でさえきちんと読んでいる人は極めて少ない。

### (一) 『論理哲学論考』一・一。

(三) 一般に『論理哲学論考』に集約される思想を「ウイトゲンシュタイン前期思想」と呼び、『哲学的探求』などにおける言語ゲーム論に代表される考え方を「ウイトゲンシュタイン後期思想」と呼ぶ。両者の中間(過渡期)にあるのが『青色本』。ごく簡単にまとめると、前期思想は、現実世界の論理世界への写像を扱った「論理の原子論」(この考え方には異論があるが)であり、後期思想は「構成モデルによるコミュニケーション論」。

(四) ウイトゲンシュタイン思想の解釈として「後期思想は、前期思想の否定のもとに成り立っている」とするものがあるが、それは誤解。前期の「論理の原子論」があつて初めて、後期の「確実性(＝事実を事実とするもの)」もしくは「超越確実性言明」が意味を持つと考えるのが妥当である。それは、(二)での前敷衍を読めば、よく理解できるはず。

(五) 関西テレビ制作の番組。二〇〇七年一月七日放送の「食べてやせる」(三)食材Xの新事実」において「やせる」ことの根拠として血液の成分の変化をあげたものの、実際には血液検査を行っていないかったことが明らかとなり、問題化した。番組は打ち切りとなった。詳細は、

<http://news.livedoor.com/article/detail/2988239>

と考える傾向があるのは否定できない。いや、もちろんそれは間違っている。どんな情報であれ、受け取った個人が真偽を判定すべきだ——でもそんなことできる。(二七) たとえば「あるある大事典」やそれに類似する番組を見たとき、私は、自分の専門に近い分野では「そんなことあるかつ？」と叫ぶことが多かった。しかし、少し遠くなると「そうなんだあ」「そうかもねえ」とかと感じたりもしていた。ま、簡単に言えば、騙されていたわけだ。(二七)

そしてさらなる問題は「誰に騙された」のかということ。もちろん捏造をしたのは制作会社のスタッフなのだろうが、直接的には「それを語った人間」つまり司会者やアナウンサーや出演しているタレントに騙されたわけだ(二八)。彼ら出演者も被害者だと言うのはおかしい。ボランティアでやっているわけではなく、給料や出演料を貰って「仕事」として行っていることだからだ。仕事であるからリスクは付いて回る。芸能人の多くが高給をとるのは、ハイリスクなことをしているからに他ならない。多くの人に語りかけるのは、その人数だけリスクが高くなる。

彼ら出演者の多くは、一見「いい人」そうだ。もちろんそうだから拔擢されるのだろう(二九)。「嘘をつきそうにない人」「いい人そうな人」が言っているから、多くの視聴者はそれを信用した。彼らの信用を利用した制作会社やテレビ局がもちろん悪いが、利用された彼らの責任が皆無であることはありえない。自分で真偽を判断できないことを、数十万人に向けて(いや、数人に向けてさえも)あたかも本当のことであるかのように語るべきではない。これは、人として基本的なことであるはずだ(三〇)。自分で信じていることができなことを誰かに言われたままに語ったとするなら、それは端的に「嘘」であり、また、とても愚かな行為である。彼らは「世界を引き受けない人たち」であり、私たちはそのような人間の口から出るどのような言葉も、ともに受け取ってはならない。もちろん、芸能人やアナウンサーが真偽を判断できるはずもないのだから、信じた視聴者が一番愚かだというのが最も正しいのだが。

(二八) ルーマン (Luhman, Niklas) によれば「信頼」というのはこの社会における重要なシステムである。もしも私たちが「信頼」をすることなく、すべての情報の信頼性を自分で判断しなければならぬのであれば、個人は情報の渦に巻き込まれて立ち往生することになる。(ルーマン(著) 大庭健(訳)、正村俊之(訳) 信頼―社会的な複雑性の縮減メカニズム、勁草書房 一九九〇)。逆に言うと、このような「信頼を損なう行い」は、社会を破壊する行為であるということ。罪は大きいね。

(二九) 実際には、「テレビなんか全部ウソ」だと考えているわけだから、騙されたわけではないが。

(三〇) この観点が薄いのは特に大きな問題である。彼ら出演者が「単に命じられたままにしゃべっているだけ」というなら、誰でもいいはずだ。そうではなく、出演者は自分の人格的背景を売り物にしてスピーカーとなり、それによって報酬を受けているわけであるから、責任を免れることはできない。CMなどで「私も使ってます／飲んでます／食べてます」というのも、同じこと。個人的には、金のためとはいえずそんなリスクを覚悟するなあとと思う。ハイリスク・ハイリターンということか。もしくは、視聴者をなめる。

(三一) だから私にはあまり声がかからないのだろう。ま、最近はずれにかかっても、ほぼすべて断っているが。

(三二) 今、いいことを言いました。

テレビや新聞で語られていることがすべて正しいということなど望むべくもないが、方向性としてはそうあって欲しいし、そうあるべきだと考える。どんなにおもしろおかしく加工してもいいが、基本的には正しいことだけが語られていなくてはならない。

嘘と間違いは異なる。不二家の「異物混入」は、最初は「間違い」であったが、後に「嘘」になった。「あるある大事典」では、最初から嘘だった。わからないものをわからないと言い、信じられるものであっても、どの程度信じられるのかを自分の言葉で語る。事実と正面から向き合うそのような態度によってのみ、その解釈は「事実」としての力を持つ。

「たのしくなければテレビじゃない」という宣伝文句は、今でも使われている。嘘でもいいってことだよな、楽しければ。でも本当は「ただしくなければテレビじゃない」——たとえばバラエティ番組であっても。楽しさを追求するのは、その大前提の後に来るものであるはずだ。学会論文<sup>(三)</sup>でも、評論でも、エッセイでも、バラエティ番組でも、その大前提は同じだ。あまりにも当たり前のことから、ことさらに主張するほどのことでもないが。

都市伝説とは、それを語り伝える人間たちが事実であると信じていることによって発生する。もちろん実際には事実ではないのだが、少なくともそれは「事実」として引き受けられていた。つまり、結果としては間違いではあつたかも知れないが、「世界を引き受けようとする営み」だった。運転免許も持っていない私<sup>(三)</sup>に対して「当たり前屋に注意」というFAXを送ってきた私の母の営みは、美しい。この類の誤謬をことさらに指弾すべきではない——その心意気や善し。しかし、もつとくまぐやろう。

世界を引き受ける人間がいて、世界は成立する<sup>(三)</sup>。怖い話だ。誰も世界を引き受けなくなつたとき、世界は「成立しなくなる」からだ。引き受ける者たちが少なくなれば、世界の存在は次第に薄くなつていく——現代では、もうすでにかなり薄い。もちろん完全になくなることはない——誰もが引き受けなくなったとしたら私が引き受けるぞ<sup>(四)</sup>。

(三) 学会で論文査読があるのは、「正しき」を担保するため。ちなみに査読はボランティア(無報酬)で行われる。ふう。ちなみに大学や研究機関などでの「紀要論文」に査読がないのは、それが「段低い」ものだからなのではなく、プロとして既に活動している研究者が書いたものであるから「正しいのは当たり前」であると考えていることによる。だって、「査読する側」であり「学位を出す側」だもの。だから査読が無いものほうが、本来は格上。それが「格下」のように扱われるのは、論文がアカデミックポストを得るためのポイント稼ぎとなつていることによる。

(四) 大学に在る職業的研究者は、運転免許を持っていないことが多い。学部四年の終わりに免許をとる人が多いのだが、その時期私たちは、大学院の入学試験に追われているため。ちなみに自分の例で言うと、院試の合格発表は(忘れもしない)三月三日だった(現在のような秋試験は無かった)。その後少し暇になるものの、免許をとる精神的余裕など皆無。第一、事前予約してないととれないしね。さらにその後は毎年、春学会・秋学会で、とても時間的余裕などない。研究者でも免許を持っている人は少ないが、よっぽど優秀だったんだなと思つた。

(五) 世界は事実の総体であり、事実は個人が超越確実性言明によつて裏打ちする(引き受ける)ことによつて事実となるのだから、そうなる。

(六) またちよつといいことを言いました。

引き受けるのは大変だし面倒だ。ときに大声を出さなくてはいけないし、リスクもつきまとう。結果として間違いであることもあるから、指弾も非難もされる。摩擦や軋轢の中に身を置くことにもなる。しかし、そのような「事実を引き受ける」営みの総体によって、世界は支えられている。

現代の日本の「都市伝説ブーム」は「世界を引き受けたくない」という練習だ。信じてもないことをただおもしろおかしく話す。そしてあとには何も残らない。誰も何も引き受けたくないし、何の責任もリスクも負わない。多くの若者がそれに参加するのは、当然のことかも知れない。だって、いいことがないのに責任やリスクだけ背負わされるのは誰でも厭だからね。そんなことを言う私だって、元も子もない言い方をすれば、商売だからやっているだけだ。でも「世界を引き受ける商売」って、ちょっとカッコいいぞ。そしてどんな商売だろうが必ずその要素を持つている。

本来の意味とは少し異なるが、ワイトゲンシュタインの言うとおり「語りえぬことについては、沈黙しなくてはならない<sup>(15)</sup>」。私たちは、「信じられないこと」を語るべきではない。それは「世界を壊す行為」だからだ。

私はただここに、都市伝説という概念の起源が、モラン<sup>(16)</sup>の『オルレ안의うわさ』とブルンヴァン<sup>(17)</sup>の『消えるヒッチハイカー』<sup>(18)</sup>にあるということを挙げて、本稿を終えることにする<sup>(19)</sup>——都市伝説は「娯楽」として扱われるものなどでは決してない、ということ。

(初出 『文學界』二〇〇七年六月号)

(15) 『論理哲学的論考』七(最終命題)。

(16) エドガール・モラン(Morin, Edgar)。社会学者。

(17) 『オルレ안의うわさ』女性誘拐のうわさとその神話作用』杉山光信訳、みすず書房、一九七二

(18) ジャン・ハロルド・ブルンヴァン(Brunvand, Jan Harold)。民俗学者。

(19) 『消えるヒッチハイカー——都市の想像力のアメリカ』(大月隆寛訳、重信幸彦訳、菅谷裕子訳、新宿書房、一九九七)。

(20) 芥川龍之介『さまよえる猶太人に』末尾による。「自分はただここに、「さまよえる猶太人」の伝記の起源が、馬太伝の第十六章二十八節と馬可伝の第九章一節にあると云うベリンググッドの説を挙げて、「先ず、ペンを止める事にしようと思っ。」